

B—72 久留米絣の模様の変遷と特長（第3報）

倉吉北高 福井 貞子

1. 山陰の絣模様についてすでに報告したが、今回は久留米絣の模様の変遷と特長について調査した結果を述べる。絣模様は地方によって独特の変遷と特長を発揮していると思われるからである。

2. 前報と同じく、久留米市内に残る古い緋布を約百種調査し、藍染め、織りの無形文化財保持者2名から聞き取りをした。大正時代以後の緋は久留米産業工芸試験場の緋標本約百種類の模様を調査した。

3. A模様の変遷

寛政12年(1800)の頃井上傳によって創織された久留米緋は、紺地にところどころ白斑のある単純なもので、霜降り、お伝緋といわれた。それが二の字型を規則的に配列したり、動植物を描き出した絵緋に進み、明治中期は幾何学的構成模様、汽船、城を4幅縫い合わせて織り出している。後期は小柄(十字緋、小合中)を最高度に複雑化し、戦争の影響により軍艦富士や、三勇士の構成模様を複雑にし、藍染めに濃淡をつけている。大正~昭和初期は、全盛期で渦巻、市松、井桁、亀甲、三角模様の小緋が主に生産され色緋(赤、黄の混入)が流行し単純な色調から脱し抽象図案に移行した。特長は全期を通じて経緯精巧な小柄と4~5幅縫い合わせ構成模様軍艦等である。山陰の絵緋にみられぬ幾何学的模様の特色がある。